

P10-210

当病棟における緩和ケアの現状

名古屋第二赤十字病院 看護部

○小林 久美子、田中 きよみ、下平 菜穂、林 めぐみ

はじめに 緩和ケア病棟やホスピスは年々増加傾向にあるが、全癌患者の9割以上は一般病棟で終末期を過ごし亡くなっている。当病棟においても平成20年度死亡患者の約8割は癌患者であり、悪性疾患で終末期を迎える患者が多いため、緩和ケアが重要となってくる。これまでの当病棟は、身体的苦痛に対しては緩和を図ってきたが、精神的苦痛に関して十分な援助ができていないのではないかと感じる事が多かった。そこで、当病棟の緩和ケアの実態を把握する為、記録を振り返った結果、緩和ケアの現状と課題が明らかとなった。この課題を基に事例研究に取り組んだ。研究方法 平成20年度当病棟で死亡された患者の17例のカルテを対象とし、STAS (Support Team Assessment Schedule) 日本語版の9項目を用いて、記録の有無を調査した。その結果を基に改善策を実施した事例の経過を検証する。結果 調査の結果から、痛み・症状のコントロールに対しては何かの対応がされているが、患者・家族の不安や病状認識など、精神的症状に関してはカルテへの記載はなく読み取ることができなかった。また職種間において、患者の訴えや症状に関する特記事項は情報伝達されるが、インフォームドコンセントの具体的な内容や患者・家族の反応については情報交換が不足していたことが分かった。この結果から、実施していても記録されていない内容については、病棟全体で記録をしていこうと呼びかけた。実施且つ記録がないものに対しては、医師への働きかけと患者、家族へのインフォームドコンセント後の理解を確認し記録に残すこととした。また、できるだけインフォームドコンセントにも同席し内容や患者、家族の反応を記録するように働きかけた。これらの改善策を実施した事例を検討した結果新たな問題点が見つかったので報告する。

P10-212

エンゼルケアの充実を目指して エンゼルメイク研究会活動報告一

静岡赤十字病院 看護部

○牧野 仁美、横地 恭子、杉山 美智子、
村松 美代子、山地 啓子

【はじめに】平成13年に小林光恵氏がエンゼルメイク研究会を立ち上げて以来、全国各地でエンゼルケアを見直す病院が増えている。そのような中で、当院でもエンゼルケアの講演が行われ、私達はその重要性を再認識することができた。そこで、「看取りの看護の締めくくりとしてきちんと死後ケアを行う」という目的で、有志を募り「グリーフケアとしてのエンゼルメイク研究会」を立ち上げた。発足後2年間の活動をまとめ報告する。【活動の実際】定例会を2ヶ月に1回開き、各病棟でのエンゼルケアの事例報告や検討、エンゼルメイクの手順書作成やメイク・着付け等の実技演習、葬儀業者との情報交換等を行った。そして、そこで出た意見を病院側へ提案や、研究会開催毎に会報を作成し病棟・外来に配布をし、エンゼルケアへの理解やスキルを広める活動を行ってきた。現在、ご遺体の変化をわかった上でエンゼルメイクスキルの向上が図れただけでなく、その人らしさを大切にすることやまた病院から帰った後の状況も理解した上で家族への関わりなどエンゼルケア全般の充実が図れてきていると感じている。また、各部署でもそれぞれの状況にあわせた取り組みをしていることがわかり、前向きによりよいケアをしたいというスタッフの力も感じている。しかし、その反面、私達が行っているケアに対する一般の方々の認識が薄いことなどの課題もわかってきた。【おわりに】よりよいエンゼルケアへの検討は患者や家族にとってのみでなく、看護師自身にとっても大切なことである。今後もエンゼルケアの充実を目指して研究会の活動を続けていきたい。最後にこの活動に賛同し協力いただいた方々に深く感謝し報告を終わる。

P10-211

当病棟でのデスカンファレンスの効果～導入前後でのスタッフの意識調査～

名古屋第二赤十字病院 消化器内科

○青山 恵里、伊藤 まど佳、阪野 美佳、白羽 祐子

【目的】当院は救命救急センターを有する急性期病院で急性期の患者が多い。また、平成20年には名古屋医療圏の地域がん診療連携拠点病院にも指定された。慢性に進行するがんは通常は急性疾患ではないが、地域医療支援病院である当院には、多くのがん患者が入院して手術、化学療法、放射線治療を受けたりしているのが実情である。当病棟は急性期の患者とともに、高齢で延命治療を望まない患者やがん末期で亡くなる患者が混在している。死を迎える患者・家族に対して看護師が中心となり看取りのケアを行っている。しかし、多忙な勤務のため、自分たちが行った看取りのケアを振り返る機会がない現状である。また、ターミナル期の患者が多く、死に対する慣れやケアが単一化してしまっていることも上げられる。そこで、看取りの場面を振り返ることで、ケアの質の向上や患者・家族のケアだけでなく、スタッフの精神的なケアにも繋がると考えたため、デスカンファレンスを取り入れたいと考えた。デスカンファレンス導入前後でアンケートを行い、スタッフの意識がどのように変化し、看取りのケアの実践に生かすことができたのか検証する。

【方法】当病棟の看護師26名を対象にデスカンファレンス導入前後の意識調査を行うこととした。アンケート内容として、デスカンファレンスの必要性やメリット、デメリット、看取りのケアに対する満足度などをあげた。デスカンファレンスはプライマリー看護師がプレゼン用紙に患者、家族の状況や治療、看護ケアの内容を記載し、看取りから2週間以内にカンファレンスを開催できるよう準備した。